

# 図画工作科、美術科の学力保障カリキュラム開発研究部

研究主題

## 図画工作科・美術科の所沢学力保障 カリキュラム

鈴	木	勢	津	子	安松小学校教諭
増	田			穀	東所沢小学校教諭
宮	島		瑞	子	向陽中学校教諭
田	中		俊	一	柳瀬中学校教諭
猪	俣		敬	修	三ヶ島中学校教諭
麻	生			子	狭山ヶ丘中学校教諭

研究協力

文教大学助教授

三 澤 一 実

担当指導主事

岩	渕	賢	一
向	井	茂	樹
田	中	和	貴

図画工作科・美術科の学力保障カリキュラム研究部 研究報告（概要）

研究主題 図画工作科・美術科の所沢学力保障カリキュラム作成

概要説明 図画工作科・美術科の基礎基本とは何か。その題材で子ども達につけたい力、つけるべき力とは何か。こうしたものを教師が持っていなければ、子ども達に学力を保障することができない。そこで私たちは所沢市内の教職員、市民を対象に図画工作科・美術科に対する意識調査を行い、分析し、課題をより明確化した。昨年度は小学校、図画工作科における基本カリキュラムを提案した。今年度は意識調査の更なる分析と中学校、美術科における各内容を通して、共通してつけたい力を明示し、各題材ごとに提案していく。

本研究の＜キーワード＞

○基礎・基本	○学力保障	○つけたい力	○意識調査
○学習指導要領	○カリキュラム	○美術科	○図画工作科

## I 研究主題

図画工作科・美術科の所沢学力保障カリキュラム作成

## II 主題設定の理由

教育の今日的課題として、学力の基礎・基本の定着がある。現行の学習指導要領は、大胆な学習内容の精選を行ったが、それはゆとりある教育と学力の基礎・基本の定着を同時に達成するためである。

さて、図画工作科や美術科における基礎・基本とは何であろうか。概論的に述べることは簡単である。それは造形的な創造活動の着想・発想の能力であり、それを表す技能・技術である。また創造活動を楽しみ、作品を味わう鑑賞の能力も含まれる。集中して創意工夫を惜しまない創造的な意欲・態度も基礎基本の大切な内容である。

しかし、日々の授業の中で、活動の具体的な目標や内容を示すとなると難しい。他の教科と異なり、図画工作科や美術科においては、基礎・基本的な内容が分かりづらいのが現状である。

なぜならば、教材が題材として提供される教科であり、学習者は題材に取り組むことにより学習内容を身につけていく教科である。しかし、教科書の編集は具体的な題材の配列であり、活動内容の紹介にとどまっている。よって活動のねらいや視点がわかりにくく、利用者（教師）に十分理解されずに実践されている傾向があるからである。

基礎・基本の充実や学力保障を実現していくためには、小学校においては題材のねらいや価値の明確化されたカリキュラム、中学校では創造的・長期的なカリキュラムの作成が急務と考え、この研究主題を設定した。

## III 研究の方法

1 平成17年度「アンケート作成・実施」と「小学校のカリキュラム作成」

図画工作科・美術科の難しさは、同じ題材の授業を実践しても、指導者の題材のとらえ

方次第で「ねらい」や「身につけたい力」が変わってしまう点にある。専門教員でない学級担任が指導する小学校では、なおさらである。

意識調査の結果からも小学校の教員の場合、教科書の題材をそのまま扱うことが多いことが分かった。そこで、小学校では教科書が例示している題材のねらいや活動の価値を明確に示すことは、学力保障カリキュラム作成において重要であると考え、その視点で詳しい年間指導計画や簡潔な一覧表を作成した。

さらに、文教大学教育学部と連携してアンケートを作成し、所沢市民や教員を対象に意識調査を行ったのが昨年度の活動である。

<既出レポート>

- ・小学校カリキュラム詳細版 → 東所沢小学校図画工作科年間指導計画
- ・小学校カリキュラム一覧表 → 所沢市教育センター自主研究員研修報告
- ・アンケート → 各学校配布済み

## 2 平成18年度「意識調査まとめ」と「中学校のカリキュラム作成」

今年度は、その継続である。まず、意識調査の集計と考察を行い、「所沢市における小学校教員の図画工作科指導意識」としてまとめ、文教大学教育学部の紀要に発表した。そしてその意識調査の結果を踏まえ、中学校の美術科のカリキュラムの作成に取りかかっている。

中学校の美術科は、図画工作科と異なり、授業時間数の制約から教科書の題材をそのまま実践できない。しかし、指導者が専門教員であり、1年生から3年生まで計画的な授業を実践できる環境がある。

したがって中学校のカリキュラムでは、小学校のような題材ごとのねらいの明確化より、美術科で「つけたい力」「基礎・基本」を大枠の目標で押さえ、専科の長所を生かして3年間のスタンスの中で、計画して進めていくことが求められる。

現在、美術科の目標は、何が大切なのか、つけたい力は何か、これらを明らかにし、3年分のカリキュラムの作成に取りかかっている。

来年度は、例示したカリキュラムをもとに検討を重ね、いくつか中学校のモデルプランとして提示していきたい。

また、小中と継続して研究した経緯を生かし、小学校と中学校の連携の在り方も研究し、交流授業を始めとする授業研究も含めながら研究を進めていきたいと考える。

## IV 研究の内容①

以下の報告書は、「文教大学教育学部紀要」に発表した「所沢市における小学校教員の図画工作科指導意識」である。この調査で明らかになったことは、学力保障カリキュラムの必要性の他に、図画工作科を教える教員の指導内容や評価方法のスキルアップを図る研修環境が少ないという問題である。（以下参照）

# 所沢市における小学校教員の図画工作科指導意識

図画工作・美術の所沢学力保障カリキュラム作成のためのアンケートから

三澤一実\*・増田毅\*\*・麻生敬子\*\*\*・田中俊一\*\*\*\*・宮島瑞子\*\*\*\*\*

Elementary School Drawing Instruction at Tokorozawa City

- An Analysis of Questionnaire Results -

Kazumi Misawa, Tuyoshi Masuda, Keiko Aso, Syunichi Tanaka, Mizuko Miyazima

要旨: 小学校では東京都など一部を除き図画工作は学級担任が指導をしている。そのような中、図画工作の指導や評価について悩みを持っている小学校教員も多い。所沢市の全小学校教員に対して行ったアンケートでは指導に自信があると答えた教員はわずか20%である。また、造形あそびについては49%の教員が取り組んでいると答えた。この数値に対し保護者のアンケートでは98%が図画工作科の必要性を認め期待し、表現する楽しさを味わわせてほしい(71%)と強く望んでいる。アンケートを分析していくと、図画工作科の教科の特徴を十分に理解し、その特性を生かし切っていない教員の実態や、そのような現状を改善するような方策がないままにある小学校の実態が見えてくる。まず教員の実態を捉え、教育現場に起きている問題を考えていくことが図画工作の学力を保障することに繋がっていくと考える。

キーワード: 学力、カリキュラム、図画工作・美術、指導、評価、保護者の期待、教員の実態

## I はじめに

平成17年度から所沢教育センター研究員<sup>1)</sup>と共同研究で「所沢市における図画工作・美術科の学力保障カリキュラムの開発」に取り組んでいる。図画工作の指導は各学校によって指導の一貫性がなく、中学校入学時に獲得している技能や能力において学校格差がありまた中学校でもカリキュラムの違いによって生徒が学習している内容の開きがある。このことは基礎的基本的な学力を保障する義務教育において決して好ましいことではない。また、なぜそのような学習内容の開きが起きているかを探ることは、所沢市における学力の保障を考えることであり、ひいては日本の図

画工作科指導の改善につながるのではないかと考えている。

日本の義務教育では、図画工作・美術科の学習はその教科の特性を生かすため題材による学習内容の習得という方法をとっている。この題材による教材提示は子どもたちの問題解決的な活動を通して学習内容を身につける特徴があり、何より教員の指導力が問われる<sup>2)</sup>。そのような指導上の特性は、美術を専門的に学んでこなかった多くの小学校教諭にとって指導上の迷いや不理解を生んでいると考えられる。そこで共同研究では9年間を通して身につける学力を明確にしたうえで、小中の連携を考えたカリキュラムの策定に取り組もうというものである。

図画工作科は知識の習得に重きを置く他の教科に比べ、義務教育において人間形成に積極的に関与し、情操や感性、想像力や美意識など個人の情緒的、形式的な能力を育てる側面が大きい。このことは教科の目標に「情操

\* みさわ かずみ 文教大学教育学部学校教育課程

\*\* まずだ つよし 所沢市立東所沢小学校教諭

\*\*\* あそう けいこ 所沢市立狭山ヶ丘中学校教諭

\*\*\*\* たなか しゅんいち 所沢市立柳瀬中学校教諭

\*\*\*\*\* みやじま みずこ 所沢市立向陽中学校教諭

を育てる」<sup>3)</sup> という文言が入っていることから理解できる。つまり図工・美術は個人の感じ方や考え方に依拠した表現及び鑑賞の活動に取り組む中で、人類に共通の価値を見い

表-1 小学校教師 図画工作科指導に関するアンケート (サンプル数 421 件)

① あなたは本年度図画工作を教えていますか。		
A.教えている	74.6%	314人
B.教えていない	25.2%	106人
C.無回答・その他	0.2%	1人
② 図画工作を担当する教員は、学級担任がよいか、それとも専任の教員がよいと思えますか。(理由を記述)		
A.学級担任	23.0%	97人
B.専任の教員	56.5%	238人
C.無回答・その他	20.4%	86人
③ 日頃の図画工作の指導で、子どもたちにどのような力をつけたいと考えていますか。(記述式)		
④ 教科書の題材をもとに、子どもや地域の実態に合わせ、題材を工夫改善して取り組んでいますか。		
A.工夫、改善している	39.2%	165人
B.ほぼ教科書通りに進めさほど変更しない。	49.2%	207人
C.無回答・その他	11.6%	49人
⑤ 教科書以外の題材に取り組んでいますか。また取り組もうと思っていますか。(理由を記述)		
A.いない	36.6%	154人
B.いる	51.8%	218人
C.無回答・その他	11.6%	49人
⑥ 造形あそびに取り組んでいますか。(理由を記述)		
A.いる	49.4%	208人
B.いない	38.5%	162人
C.無回答・その他	12.1%	51人
⑦ 身の回りに図画工作の指導について専門的なアドバイスをもらえる教員がいますか。		
A.いる	35.9%	151人
B.いない	54.6%	230人
C.無回答・その他	9.5%	40人
⑧ 図画工作の指導についてお聞かせください。		
A.自信を持って指導している	20.0%	84人
B.他の教科と比べてどちらかというと自信がない	66.3%	279人
C.無回答・その他	13.8%	58人
⑨ 図画工作の評価についてお聞かせください。		
A.自信を持って評価している	18.8%	79人
B.他の教科と比べてどちらかというと自信がない	67.2%	283人
C.無回答・その他	14.0%	59人
⑩ 担当学年を教えてください。		
⑪ あなたの年齢をおしえてください。		

出していこうとする学習とも言える。しかし共通の価値といえどもそれは明快な答えを持つものではなく、個人の中に形成されていく価値である。故に、一つの答えに収束できない指導の難しさは常に現場の教員が抱えている課題である。例えば「子どもの描いた絵をどのように評価してよいか分からない」というような声もその一例であろう。その現状から、まずは小学校の教員が抱えている指導上の問題点を明らかにする必要があると考えた。

さて所沢市であるが埼玉県西部に位置し東京のベッドタウンとして発展してきた人口約34万人、学校数47校(小学校32校、中学校15校、平成18年度現在)の自治体である。所沢市は埼玉県内でも図工・美術が盛んな土地である<sup>4)</sup>。本論では、所沢市の小学校教員の図画工作科指導のアンケートの分析を元に、今日の小学校教員の抱えている図画工作科指導について指導上の問題点を明らかにし、その改善の方向性を示していきたい。

## II アンケート結果から見る教員の実態

### 1 アンケートの内容と研究の方向性

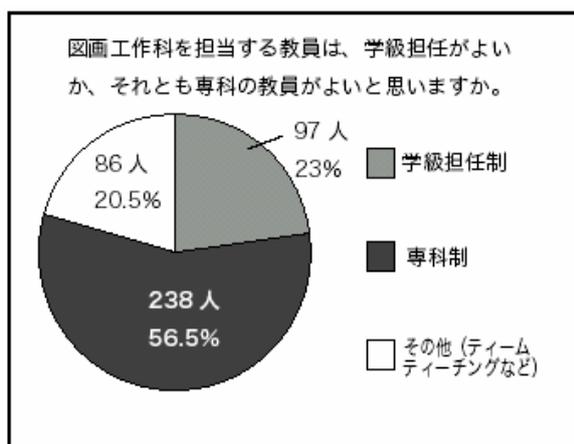
本研究は小学校教員の指導実態を調査するために質問紙法によるアンケートを実施した。アンケートは管理職、養護教員を除く市内全教員754名を対象に依頼し、421名の回答を得た。(回収率56%)質問項目と回答は左表の通りである。これを元に(1)学級担任と専科について、(2)育てたい力、(3)授業及び指導について、(4)造形あそびへの理解、(5)保護者の期待、の5観点から現状分析と考察をおこなう。そして所沢の図画工作・美術科における学力を保障する手だての一方策を提案する。(三澤一実)

### 2 アンケート分析・教員の姿

#### (1) 学級担任と専科制について

##### ① アンケートの分析から

設問②「図画工作科を担当する教員は、学級担任がよいか、それとも専任の教員がよいと思えますか。」について、A:学級担任97人、B:専任教員238人、C:その他86人で



グラフ-1 教科指導は専科制か学級担任か

あった。回答の内容は、専任教員が指導する良さを専門性の観点から、そして学級担任が指導する良さを児童理解の観点から捉えている点特徴的である。その他では、双方の長所を生かす提案が大半であった。以下A・B・Cについて詳しく見ていきたい。

A：「専任教員がよい」と答えた理由

◎良い指導を行うためには、図画工作に関する専門的な知識や技法技術が必要だから (159人)

- ・児童の能力を十分に引き出す指導
- ・発達段階に応じた指導
- ・大切なポイントを押さえた指導
- ・教材教具に対する豊かな知識
- ・教員自身の技能や感性の高さ
- ・系統的な指導
- ・指導や評価に自信がない等を含む

○専任の教員ならば、教材研究や授業の準備に十分な時間が確保でき、効率の良い授業も期待できるから (56人)

- ・学級担任では多題材・広範囲な活動内容を全て指導できない
- ・指導や評価に自信がない 等を含む

B：「学級担任がよい」と答えた理由

◎児童理解・作品の理解の点において学級担任が指導するのがよい (39人)

- 学級や児童の実態に合わせて、指導の内容や時間の弾力的な運用や個別指導が行える
- ・現行の指導時間数では、授業時間の弾力的

な運用が必要である

C：「その他」

◎低学年では学級担任が指導し、高学年で専任の教員が指導する (33人)

○専任教員と学級担任とのチームティーチング (10人)

○どちらが良いとは言えない (10人)

②学級担任と専任教員についての考察

実際は学級担任が指導しているながら「専任の教員とどちらがよい」と尋ねられると、56.5%の教員が専任教員による授業を望んでいることに注目したい。その他の回答の中から「専任の教員とのチームティーチングの授業」を加えると70%を超える数となる。それに対し「学級担任がよい」と答えたのは23%であった。その理由のほとんどは「図画工作科を自分(学級担任)で指導することが児童理解に大変有効である」と答えている。「低学年では学級担任がよい」と「チームティーチング」を合わせると33%となる。「専任の教員がよい」と答えた中にも「学級担任のよさ」に児童理解を上げている者も少なくないことや「どちらが良いとは言えない」等の意見を加えると約4割と受け取ることができる。

ところが、アンケートに出てきた結果は、学級担任で図画工作科の指導や評価に自信を持っている教員は少なかった。児童理解においては専任の教員よりも多くの時間を接し日常の姿を知っている点、また、児童が図画工作で見せる姿を知ること、児童の姿をより多面的に捉えられ日々の指導に生かせる点など、学級担任のよさを感じつつも、授業の内容と質において専任の教員による指導を望んでいる。専任の教員の専門性、専科制による授業の準備や効率の良さ、系統的な指導を高く評価する実態がある。学力保障の観点から見れば、「専任の教員による指導」がよいという結果である。しかし、このことは、専任教員をおけば解決できる問題であろうか。図画工作科の目標は「表現する喜び」を味わわせることにある。児童の内面的な表現欲求を満

たす上でも、児童に日常的に接している学級担任の方が良いのではないだろうか。

「専任教員がよい」理由の「専門性」については「専門的な知識や技法・技術指導」をあげる教員が一番多かった。にもかかわらず、学級担任は指導に不安を持っている。それを取り除くことができれば、学級担任のよさを生かし児童理解を深められる教科として、図画工作で育てる学力の充実とともに子どもとの関係の中で重要な役割を持った教科として位置づけられてくる。(増田毅)

(2) 育てたい力

①育てたい力のアンケートから

設問③「日頃の図画工作の指導で、子どもたちにどのような力をつけたいと考えていますか。」は回答が記述であるため、学習指導要領の内容をもとに、分析項目を8項目設定し集計を行った。(表-2)

表-2 教師が考える図画工作で育てたい力

表-2	項目	人数
見る力 (55人 14.8%)	感性・感受性	27人 (7%)
	視察力	18人 (5%)
	想像力	10人 (3%)
表す力 (257人 71.8%)	表現力	135人 (35%)
	技術・技能	67人 (17%)
	創造力(発想力)	55人 (14%)
態度 (73人 20.4%)	姿勢(集中力, 積極性他)	37人 (10%)
	楽しむ	36人 (9%)

初めに ④「感性・感受性」については、全体の1割弱の回答数が得られ「豊かな感性」と書かれたものが圧倒的に多く「色彩感覚」や「鑑賞力」と具体的な内容で書かれたものもあった。

すべての回答の中で④「表現力」をあげたものが最も多い。その中には「自分の思いを表現させたい」「自分の表現方法を見つけたい」「素直に表現させたい、自由にのびのび表現させたい」の記述が多々見られた。これらを見ても、教員が児童の表現力を育てたいと

純粹に願っていることがうかがえる。また表現力の中には「描写力」という回答も1割以上を占め、中学校を意識した力を育てたいという考えがあることも見逃せない。

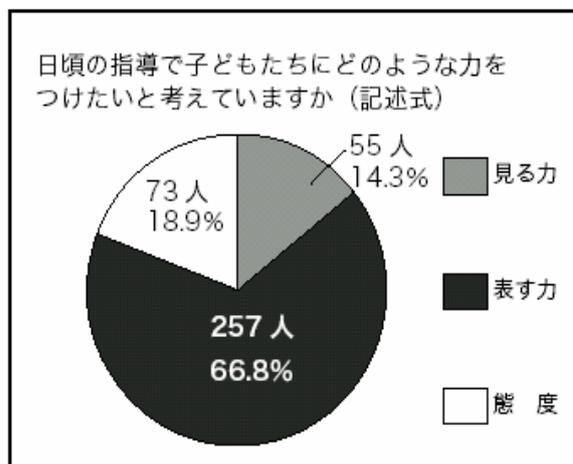
⑤「技術・技能」についても様々な回答が得られた。記述の中では「基礎的な技術、技能」という言葉を使い回答しているものもあれば、より具体的に書かれているものもあった。

「絵具の使い方」「色の作り方、ぬり方」「図画工作で使用される用具全般の使い方」である。つまり、より自分らしい表現をするためには、基礎的技術、技能の習得の裏付けがあってこそ可能であると感じているということだろう。このことは前述の専任の教員への期待と一致してくる。

設問③の解答で特徴的と思われるのが、授業態度に関する内容をあげている点だ。具体的な回答として「集中して作業をする力、作品を完成させる力」「積極性」「表現や創作活動を楽しめる」さらに「整理整頓できる力」である。これらからは、図画工作の授業そのものを集中させたい、あるいは作品に根気強く取り組ませたいという教員の思いが感じられる。規律ある態度などの教育課題が、表現や技術指導と同様に重要視されている小学校の現状が垣間見られる。

②育てたい力についての考察

記述内容をさらに「見る力」「表す力」「態度」の3つに分類しまとめてみる。多くの教



グラフ-2 つけたい力の割合

員が「見る力」よりも「表す力」「態度」を育てたいと考えている。(グラフ-2) これはこのアンケート結果の大きな特徴と言える。

「態度」に関しては、整理整頓も含め、集中して授業に取り組みせたい。作品を完成させたい。しかしそれ故に作業中の注意が増え、結果的に子どもたちが創作活動を楽しんで行っていないのではないかという疑問も生じてくる。つまり、学級担任が担当しているということで、生徒指導的側面が強調され、一方で児童が心から解放され表現し活動を存分に広げていく自由な授業のあり方に、規律が守られなくなる不安も生じてしまうのではないか。

見る力に関しては全体で14%である。作品を作り出すには基礎的技術に裏付けされた表現力なくしては完成に至ることは有りえないとか、教員側の教えなければならない、また、作品を完成させなければならないという考え方がどうしても先行してしまう。これらが「見る力」を育てたいという考えに至らない実態であろう。しかし見る行いのないところで物を作り、描くことは出来ない。「見る力」をつけることが、「表す力」を育てることの大前提であると言っても過言ではない。これらを踏まえると、まず「見る力」を育てることの重要性を理解してもらい、その上で回答内容に即した資質向上を図る研修が必要であると考えられよう。(麻生敬子)

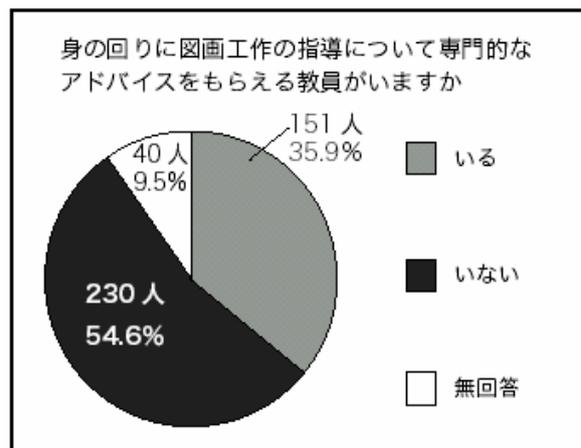
### (3) 授業及び指導について

#### ①アンケート分析

設問⑦「身の回りの図画工作について専門的なアドバイスをもらえる教員がいますか」について「専門的なアドバイスをもらえる教員がいる」が全体の35.9%であり、「いない」は、54.6%である。このアドバイスの有無が題材の工夫及び指導・評価項目とどのように関連しているか見てみたい。設問④の「教科書の題材をもとに、子どもや地域の実態に合わせ、題材を工夫改善して取り組んでいますか」について、題材を工夫して取り組んでいる率は、アドバイスをもらえる教員はもらえ

ない環境にある教員より20%高い。(表3㊦㊧)そして、ほぼ教科書通りに進めている率は、アドバイスをもらえない教員の方がもらえる教員より23%高い。(表3㊦㊨)このことからアドバイスをもらえないから教科書通りに授業を進めていく実態が読み取れる。

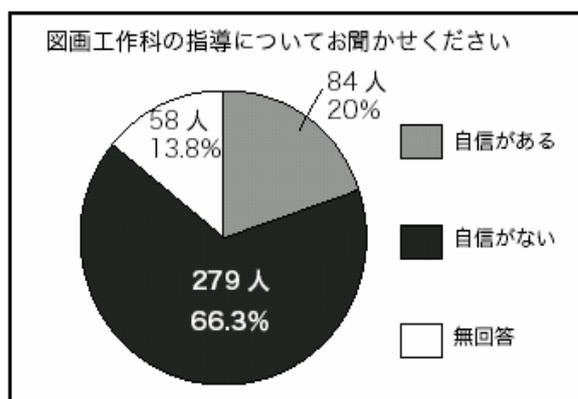
次に、アドバイスをもらえる環境を年代別でみたとき、30代から50代までは、「アドバイスをもらえる教員がいない」の率が49.3%～



グラフ-2 アドバイスをもらえる教員の存在

表3 アドバイスの有無と題材の工夫

表-3	アドバイスをもらえる教員がいる	アドバイスをもらえない教員がいない
題材を工夫して取り組んでいる (165人, 39.2%)	79人 (52.3%) ㊦	74人 (32.2%) ㊧
ほぼ教科書通り (207人, 49.2%)	60人 (39.7%) ㊨	144人 (62.6%) ㊩



グラフ-4 図画工作科の指導について

59.4%と高くなっていくが、20代は57.6%と、40代とほぼ同じ割合を示している。(表-5) 表1設問の⑧「図画工作の指導についてお聞かせください」では、自信を持って指導している」が20.0%であるのに対し「他の教科と比べると自信がない」は66.3%である。これを表1設問の②「図画工作を担当する教員は、学級担任がよいか、それとも専任の教員がよいと思いますか」との関連で見るとどちらも半数を超えている。(表-4㉔㉕)しかし表1設問④「教科書の題材をもとに子どもや地域の実態に合わせ、題材を工夫改善して取り組んでいますか」という視点で見ると、自信を持って指導している教員のうち題材を工夫して取り組んでいる割合が64.3%であるのに対し、自信がない教員では題材を工夫して取り組んでいる割合が34.4%である。(表-4㉑㉒)

年代別に見ると、年代が上がるにつれ、「自信を持って指導している」教員の割合が3.6%～26.1%とわずかではあるが増えている。

設問の⑨「図画工作の評価についてお聞かせください」についても設問の⑧「指導」に関

する結果とほぼ同様の傾向が見うけられるが、ここで特筆すべき点は、評価に自信がある教員は題材工夫率が高いという点である。(表4㉔)また、年代別では30代の11.9%を除きどの年代も「自信を持って評価している」教員の割合が20%前後を示している。

#### ②授業及び指導についての考察

今回調査した小学校教員の実態からは、図画工作の指導に関して自分の指導に自信がもてないという意識が読み取れる。よって教科書通りの題材で指導をしている教員が多いと考えられる。年代別の結果からは経験を積み重ねることによって少しずつではあるが自信が持てるようになる。しかし、それでも50代で61.2%の自信がないという教員が存在している。また、「図画工作の指導についてお聞かせください」では、自信がないので教科書通りに進めることが多いという傾向が現れた。表3の結果を合わせて考察すると、アドバイスをもらえる教員がいる場合は題材の工夫をする割合が高い。また、表4の題材の工夫をしている教員は自信を持っている率が高いという結果から、題材の工夫を話題として、教

表-4 教科指導に関する意識と専科制、題材の工夫との関連

表-4	指導について		評価について	
	他の教科と比べ自信がある 84人(20.0%)	他の教科と比べ自信がない 279人(66.3%)	他の教科と比べ自信がある 79人(18.8%)	他の教科と比べ自信がない 283人(67.2%)
図画工作を教える教員は学級担任がよい(23%)	34人(40.5%) ㉔	55人(19.7%) ㉕	29人(36.7%) ㉖	58人(20.5%) ㉗
図画工作を教える教員は専任がよい(56.5%)	49人(58.3%) ㉘	178人(63.8%) ㉙	31人(39.2%) ㉚	174人(61.5%) ㉛
題材を工夫して取り組んでいる(39.2%)	54人(64.3%) ㉜	96人(34.4%) ㉝	53人(67.1%) ㉞	94人(33.2%) ㉟
ほぼ教科書通り(49.2%)	23人(27.4%) ㊱	175人(62.7%) ㊲	23人(29.1%) ㊳	177人(62.5%) ㊴

表-5 世代別に見た回答の割合

表-5	アドバイスをもらえる教員がいる	アドバイスがもらえない教員がない	自信を持って指導している	他の教科と比べると自信がない	自信を持って評価している	他の教科と比べると自信がない
20代(59人)	25人(42.4%)	34人(57.6%)	8人(13.6%)	42人(71.2%)	11人(18.6%)	40人(67.8%)
30代(67人)	30人(44.8%)	33人(49.3%)	10人(14.9%)	49人(73.1%)	8人(11.9%)	54人(80.6%)
40代(115人)	42人(36.5%)	66人(57.4%)	21人(18.3%)	83人(72.2%)	23人(20%)	79人(68.7%)
50代(165人)	52人(31.5%)	98人(59.4%)	43人(26.1%)	101人(61.2%)	35人(21.2%)	107人(64.8%)

員間でディスカッションをしていくことにより、教員の指導に対する自信（積極性）が獲得されていくのではないかと考えられる。

年代別に見たアドバイスをもらえる環境に関しては、一般的に経験年数が上がるに従い教わる立場から教える立場に変化するとともに、また経験を重ねるごとに確立する自分の指導スタイルを変えられない傾向も現れる。しかし、そのような中でアドバイスをもらえる環境にいない20代の57.6%という数字についてはどのように捉えたらよいのであろうか。教員集団の年齢構成の偏りや校内研修体制にも関係し、また、同時に職員室文化<sup>5)</sup>の衰退も考えられる。

表1設問の⑨「図画工作の評価についてお聞かせください」に関しては「図画工作の指導」とほぼ同様の傾向が見受けられた。年代別の結果においては、どの年代においても「自信を持って評価している」という割合が20%前後と低い。中でも30代の率が11.9%と特に低いのは、ちょうど年齢的に子育ての時期と重なり忙しいとともに一方では経験も積み、指導力も向上する世代だからこそ生じてくる悩みなのではないだろうか。

図画工作の指導及び評価は評価規準に基づいた評価が教員個人の判断に関わる部分が多い。つまり、教員自身の子どもの姿や作品を洞察する力に大きく左右されると言えよう。言い換えると他の教科のように複数の教員が共通してテストや解答によって「分かる分からない」「できないできない」を客観的に判断することのできない図画工作科の特性がある。評価が教員個人の見る力に委ねられ、それは題材における目標設定の不明確さがそのまま評価の曖昧さに結びつくのである。この問題の解決には、教員が自ら課題を持って学ぼうとする時期において何らかの支援体制を考えていかなければならないと思える。

（田中俊一）

#### （4）造形あそびへの理解 - 分析と考察

造形あそびの充実は義務教育9ヶ年におい

て、図工・美術で身につける学力を考えると重要な役割を果たす。なぜならば、造形あそびのように、造形的な表現行為や素材への操作をその場その場で判断し、常に新しい表現を追求し作品を作り変えていく力は、造形表現を支える基本的な資質や能力である。小学校における造形あそびの充実は中学校の美術を学ぶ上で基礎的な学力として蓄積され、特に、中学校美術の時間数が少ない中で充実した学習をするために重要となる。

##### ①アンケートの分析

「造形あそびに取り組んでいますか」という設問をアンケートに設置した理由は、現行の学習指導要領で高学年まで導入された造形あそびがどの程度実施されているかを把握するためである。また、造形あそびに対する考え方を知るために取り組みに対する理由も書いてもらった。この理由の分析から教員の造形あそびに対しての理解度や意識を読み取ることができる。

アンケート集計から造形あそびへの取り組み状況は、取り組んでいる49%、取り組んでいない38%、無回答13%であった。（表1）現行の学習指導要領では高学年まで造形あそびが導入され「つくりたいものをつくる」活動と共に図画工作科の一つの柱になっている。しかし現状では約半数しか行われていない。次に造形あそびの実施状況と他の質問項目との相関を見てみる。

造形あそびをしている人の中で、身の回りにアドバイスをもらえる教員がいるかないかで見えた場合、身の回りにアドバイスをもらえる教員がいない割合が高い。（表-6、④、アドバイスをする立場であることが予想できる）また、造形あそびをしていない教員では、身の回りにアドバイスをもらえる教員がいない割合が多い。（表-6、⑤）造形あそびの取り組みと教科書題材との関連では、教科書の題材を自ら工夫して取り組む教員は、造形あそびに対する意識もやや高いと言える。（表7）また、表7からは、教科書通りに進めて